変っていくわがまち⑥

全線開通がまたれる広域農道

久礼田ではすでに完成

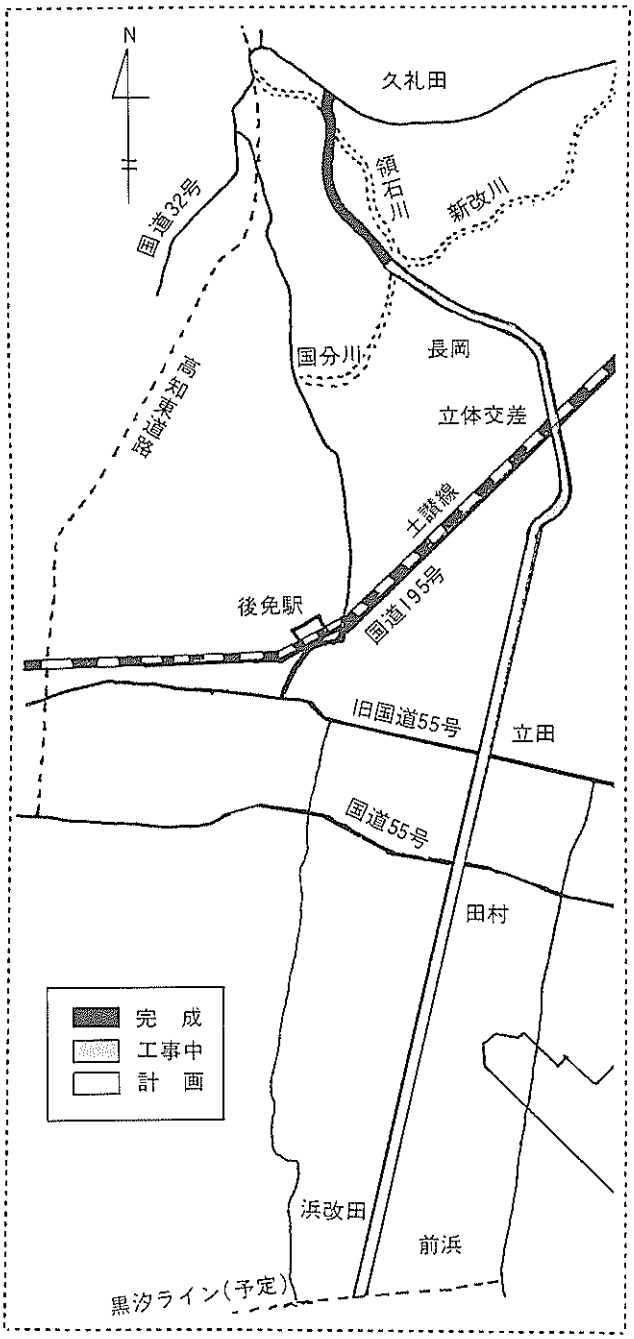
県下で最大の穀倉地帯をもつわが南国市（県全体農業の約1/10の規模）は、東西の道路網は国道五十五号（旧南国バイパス）、県道後免野市線（旧国道五十五号）、国道百九十五号など比較的整備されているものの、南北の道路網はほとんど整備されていない現状です。

そのため、農産物（特に軟弱野菜）の集出荷ばかりでなく、一般の通行にも大きな不便をきたしています。そこで、昭和四十八年度に、図のように三和（浜改田）と前浜の境から久礼田を結ぶ大規模な農道（延長約十一キロメートル、幅七・五メートル）の新設が、県営事業で計画されました。昭和四十九年度から北部地区から始め、石油ショックなどを経て、実際の工事は、昭和五十一年度から着手されました。

今年の三月現在で、久礼田地区の県道植野土佐山田線分岐から国分川までが完成（全体の約三十％）して、すでに通行しています。

これからの工事は、国の予算に合せて進められます（負担区分、国六十五％、県二十五％、市十％）ので、全線開通時期は確定していません。

広域農道の両側には、県下一の優良農地、野菜集出荷センター、ライスセンターなどの農業施設があり、早期全線開通は、特に農業関係者から大きな期待がかけられています。また、この農道には、一般生活用道路としての要素もあり、同じ昭和四十八年度に計画された高知東道路（宍崎～介良間・延長七キロメートル、幅二十五メートル、現在一部着工）に対して、南国市東部の〝動脈〟となります。

昭和五十六年度からは、長岡以南の平野部の工事になりますが、大小の水路や農道との交差も多くなり、地元農家との『合意』がなにより優先して得られなければなりません。

稲作転換が、ますます拡大されつつある昨今、農産物の集出荷と市場との距離と時間を短縮する『広域農道』のもつ価値は大と言えるようです。